

(4) ①様式第4号-2 (報告書)

NITS カフェ報告書 ※機構記入欄	実施機関名・連携機関名 宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
No. : -	セミナー名 : 【NITS カフェ in 宇都宮】 「省察を深める対話型授業検討会」

**テーマ :** 栃木県内の多くの学校では、教員の授業力向上のため、授業研究および授業検討会が行われている。また、教職大学院においても、授業検討会を中核とする授業が多い。本企画では、授業検討会を対話と省察から深める手法を研究している渡辺氏に、その理論と具体的方法を紹介していただく。また、グループディスカッションを通して、各学校現場における「授業検討会」をどのように改善すべきか、大学院はその取組にどのように関わることができるかを、改めて考える機会としたい。こうした意図をもとに、テーマを設定した。

**内容 :**

【開会行事】

・NITS カフェの趣旨説明 ・講師紹介

【講話・演習】

「省察を深める対話型授業検討会」 東京学芸大学教職大学院准教授 渡辺 貴裕 氏

※講話の中にグループディスカッションを何度も織り交ぜる形で進められた。

○導入

Q : この空間 (部屋) はなぜ気分が明るくなるのか。

A : 色々な色があるから、周りにホワイトボードがあるから

→自分の感覚を働かせることが大切である。

○授業の振り返りの必要性

・経験から何かをくみ出すような振り返り (省察) が必要

Q : 授業で起きたことを振り返り、楽しいと思う場面は。

A : 子供からの反応が予想以上だったとき、思ったよりうまく事が運んだとき

→何かハッとさせられたとき (今までとは違った見え方をしたとき)

・シングルループ学習…元々もっている枠組みの中でふりかえるもの

・ダブルループ学習…元々もっている枠組み自体を問い直す振り返り

Q : 授業検討会は、ダブルループ学習になっているか。なっていないとしたら阻害要因は何か。

A : たくさんの引き出しをもっていない、方向がずれていく など。

→ (例) 子供の姿が語られていない、授業者 VS 学習者という対立構造

○対話的模擬授業検討会

・従来型…授業実践→評価→講師からのアドバイス

・対話型…実際にその場で起こったことを、フラットな関係で話し合いをする

○教師のリフレクション

・F.コルトハーヘン「ALACT モデル」 起きた出来事をもとに、問題を一段掘り下げる

・回数を重ねての変化 一つの発話大→一つの発話小 (発散と収束)

○対話型模擬授業検討会を経験した立場から (東京学芸大学教職大学院 植野 泰廣さん)

・対話型模擬授業検討会で目指すもの

他者からの視点を踏まえて「当たり前」を顕在化、自分だけでは気づき得なかった省察のきっかけを生み出す

○教師自身が学び手の感覚を取り戻す

子供の姿を語る場合、傍観者としてではなく、グループの中に入って同じ目線で。

○セッション 小3 理科「物の重さ」

【閉会行事】謝辞

### 成果：参加者の声から

- ・当たり前を問い直すということ、教師が学び手としての感覚を取り戻すことが大切ということが、印象に残った。
- ・勤務校では、授業検討会を実施することも簡単ではないが、その大切さやおもしろさを改めて実感した。
- ・自分の考え方の枠やくせにとらわれず、様々な視点で考え、子供たちのための授業について語り合っていきたい。

アイデアや工夫したこと：①一つのテーブルの人数を5人とし、適宜2,3人の協議を行った。②テーブルの中で、現職教員、行政、院生、修了生が混じるようにした。

### <写真・図など>



【渡辺氏による講話】



【協議の様子】



【植野さんのコメント】



【協議の様子】



【会場全景】



【講話概要の視覚化】